



# 新潟市立西特別支援学校

2025 年度 学校だより 2 月号

## 「主体的な参加」「つながりの広がりや深まり」を目指した P T A 活動

教頭 渡部 久美子

今年度、西特別支援学校の P T A では、これまでの取組を踏まえて、「主体的な参加」「つながりの広がりや深まり」を目指して P T A 活動を実施してきました。

具体的な活動として、「保護者交流会」と「保護者のニーズに沿った研修会」の実施があります。「保護者交流会」は、10月と1月の学習参観日に学年ごとに実施しました。

さて、「保護者のニーズに沿った研修会」については、昨年度実施した保護者交流会で話題に上がった高等部の学習活動や就労について学ぶことができるよう、西蒲高等特別支援学校のオープンスクールや学校説明会を研修の場として7月に実施しました。多くの保護者の皆様にご参加いただきました。研修後に実施したアンケートから、保護者の皆様が高等部の様子について見たり聞いたりすることは、高等部進学イメージをもつことや高等部についてより詳しく知りたいという気持ちをもつことにつながったと考えています。また、お子さんの現在や将来について考え、できることに取り組んでいこうという前向きな気持ちをもつことにもつながったと考えています。今後も、保護者の皆様のニーズに応じた研修の工夫を図っていきます。

引き続き、保護者の皆様が主体的に参加し、つながりが広がったり深まったりするような P T A 活動を、保護者の皆様と共に進めていきたいと思っています。

## 未来の特別支援学校は

研究主任 岩野 広明

(※) Society5.0

狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く新たな社会。サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会。内閣府 HP [https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/) より 1



西特にも一人1台 iPad が配備から5年が経ち、この度一層快適に操作できる新端末へ切り替わりました。世の中もタブレット注文や QR 決済、オンライン会議などデジタル化は劇的に進みました。また、人工知能 (AI) や仮想現実 (VR) の普及により、政府が目指す社会「Society 5.0 (※)」が現実味を帯びる中、教育もこれまでの「画一的な学び」から AI 等を活用した「個別最適な学び」へと大きく転換しようとしています。これから先の、近い未来の特別支援学校、特別支援教育はどのようなになっているのか想像してみました。

AI の導入	個々の実態や特性、発達段階に応じた「オーダーメイド」の課題設定が可能になり、一人ひとりにより最適化された学習が提供できるかもしれません。
生体センサーの普及	バイタルデータの変化から発作の予兆を検知して未然に防ぐほか、感情の起伏を予測して早めのクールダウンを促すなど、安心安全に生活できる時間が増えるでしょう。
VR を活用した事前学習	買い物や公共交通機関の利用を校内で疑似体験できます。本番に近い環境を繰り返し練習することで技能を身に付け、社会参加への自信にも繋がります。

技術の進歩は、間違いなく子どもたちの成長を促したりや困難な状況を克服したりする一助となります。しかし、どんなに科学技術が進化しても、特別支援教育の核には「ひと」が不可欠です。直接触れ合い、寄り添いながら行う「ひと (= 私たち教職員)」の指導・支援は、ロボットや画面越しでは代替できません。だからこそ、私たち教職員は、最新のテクノロジーを正しく理解し活用していくとともに、時代や社会のニーズにも合わせた指導・支援のための技能や資質もアップデートしていかなくてはなりません。私たちの学び続ける姿勢こそが、未来の特別支援教育を支える基盤となるのです。そんな研究や研修をこれからも計画、運営していきたいと考えています。

## 「トライアングルプロジェクト」をもとに

特別支援教育コーディネーター 関根 潤子

私が福祉との連携を経験したのは、今から15年ほど前です。当時担任していた小学部のお子さんの連絡帳に、お母様から「家庭で困っていることがある」という切実な思いが書かれていました。担任3人で「どう動けばいいのか」と話し合っていた矢先に、そのお子さんの利用している福祉事業所から学校へ連絡が入りました。お母様が事業所にも相談されたことで支援会議が開かれることになりました。

当時の私は「福祉との連携する」という発想がまだ乏しく、事業所からの提案はとてもありがたかったです。福祉サービスの見直しを行ったり、事業所と特性に合わせた支援方法を共有したりすることで、そのお子さんは家庭や学校でも少しずつ落ち着いていきました。そして、進学しても、家庭と福祉、学校の連携は切れ目なく続いていきました。今でいう、トライアングルプロジェクトですね。

当校は、本年度私を含め3名の特別支援教育コーディネーター（小林恵、登石）がおり、トライアングルプロジェクトをもとに、家庭と福祉と連携して支援を行っております。

日々の生活の中で、「これはどうしたらいいのかな?」「これでよかったかな?」などと悩むことがありますら、いつでも連絡帳やお電話でお知らせください。私たちも一緒に考えていけたらと思っています。

## 適切な進路選択のために

進路指導主事 篠川 和弘

1月30日（金）、高等部入学者選考が行われ、中学部3年生が受検に臨みました。

新潟市内には、知的障害の高等部を擁する特別支援学校が4校あります。高等部には職業学級・普通学級・重複障害学級があり、選考方法から教育課程、卒業後の主な進路等も異なります。

	職業学級	普通学級	重複障害学級
出願資格	・ 中学部普通学級に在籍する生徒 ・ 将来、 <b>一般就労を目指す生徒</b> ・ 公共交通機関での <b>自力通学が可能</b> な生徒 ・ 出願校の <b>教育相談を受けた生徒</b>	・ 中学部普通学級に在籍する生徒 ・ 将来、福祉就労または一般就労を目指す生徒	・ 中学部重複障害学級に在籍する生徒 ※事前の教育相談等が必要な場合も
通学区域	学校ごとに指定された区域	新潟市、弥彦村	
選考内容	面接、学力調査、作業能力調査、運動能力調査	面接	
教育課程の特徴	・ 就労に向けた実践的な学習が中心	・ 個々のペースに合わせた学習が中心	

新潟市内4校の高等部の普通学級と重複障害学級は、市内全域と弥彦村を学区（通学区域）として入学者選考が行われます。選考委員会が、志願者との面接及び提出書類に基づき総合的に入学者を選考し、通学の利便性及び自力通学の可否を考慮して受入校を決定します。これを「総合選考」と呼びます。総合選考は一般の高校入試と異なり、志願者が特定の学校を選ぶのではなく、新潟学区全体で志願者を受け入れ、選考委員会が各生徒の入学先を決定します。この背景には、生徒一人一人の実態やニーズに合った教育内容を学区全体という大きなチームで提供する、という理念があります。

進路指導部では、進路だより等を通じて進路に関する情報を発信してまいります。早い段階で高等部や入学者選考について知っていただき、お子さんの進路選択に役立てていただければと思います。



## 本を開けば、笑顔があふれる



図書館教育担当 大橋 和代

今年度も多くの児童生徒が図書館を利用しました。新しい本を楽しみにしている子ども、教職員のおすすめの本を借りようとする子ども、図書館司書やボランティアさんの読み聞かせの時間を楽しみにしている子どもたち……。子どもたちは、様々な場面で本に触れ、たくさんの笑顔があふれました。

今年度は児童生徒・教職員がさらに本に親しみやすい環境を考え、「児童生徒と本をつなぐ」「児童生徒と学習をつなぐ」機能の充実を目指して取り組んでいます。新たな取り組みとして「にしとく電子図書館」の整備を行いました。学習用端末（iPad）の「ロイロノート」アプリ内の「にしとく電子図書館」に、子どもたちの大好きな絵本や採択教科書とされている絵本の読み聞かせ動画がたくさん入っていて、学習や余暇の時間に活用しています。読み聞かせ動画で本のお話に親しんだことから、読み聞かせ動画に登場した本を実際に手に取るなど本への興味につなげることができたり、興味の広がりが見られたりしています。

また、バリアフリーでアクセシブルな図書館を目指し、1階図書コーナーの充実、2階にブックトラックの設置を行い、さらに多くの本を自分から選び、読書を楽しむ機会を増やしました。今後も様々な形で、本と子どもたちが触れ合う時間をつくっていききたいと思います。

## 「ありがとうの木」が満開、給食週間

食育・給食指導担当 黒井 恵理子

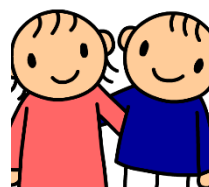
1月26日から1月30日までの5日間を給食週間とし、特別メニューの提供や、栄養教諭や調理員さんへの感謝のメッセージ募集を行いました。また、「給食ができるまで」の動画を視聴し、調理員さんが給食を作っている過程や調理室の中の様子を見ることができました。「元気もりもりじょうぶな体を作ろう赤黄緑」をテーマに、中学1年生が食育の授業で考えた献立や、冬季オリンピック献立の特別メニューは、栄養バランスがよく、免疫力を高める栄養たっぷりの献立です。どのメニューも好評で、児童、生徒たちの「美味しい！」という声をたくさん聞くことができ、とても嬉しく思いました。

玄関ホールに掲示した「ありがとうの木」には、いつも給食を作ってくれる栄養教諭や調理員さんに向けて、たくさんの感謝のメッセージが集まりました。また、自分の好きな給食シールを貼った「ありがとうの花」も集まりました。

普段あまり伝えることのできない感謝の気持ちを伝えたり、自分の健康について考えたりする良い機会になったと思います。「ありがとうの木」が感謝のメッセージやお花でいっぱいになると同時に、児童・生徒たちの暖かい気持ちにたくさん触れられた給食週間になりました。

# 居住地校交流の様子

(居住地校交流担当 片桐 悠佳)



居住地校交流が始まって14年目となりました。今年度は17名(小学部13名、中学部4名)の児童生徒が参加しました。そのうち、3名が初めての参加でした。

交流の主な目的は、「保育園や小学校で一緒だった友達との関わりを継続する」「地域の同年代の子どもたちとの関わりを広げる」「地域の小中学校で、より多くの活動を経験する」など、お子さんによって様々です。今年度は、「運動会や文化祭、遠足、児童会祭り等の行事への参加」「夏祭りやクリスマス会等のお楽しみ会への参加」「朝の会や給食、清掃活動への参加」「体育や図画工作等の授業への参加」などの参加を通して交流が行われました。児童生徒の実態に合わせて、保護者の皆様や相手校と相談して交流を計画・実施しました。

今年度、交流を行った保護者の方からは、「クラスの子どもたちが優しく接してくれ、一緒に楽しむことができました」「地元の子どもたちと関わることがかなり嬉しかったようです。一緒に活動できたことが、子どもの自信にもつながったようです」などの感想が寄せられました。

また、相手校の先生方からも、「交流に来ていただけて、当校の生徒たちにとっても良い経験となりました」「昨年と比べるとより交流が深まった感じがありました。毎年行うことによってよい影響があると思いました」などの感想が寄せられました。

居住地校交流は、小・中学部のときにしかできない貴重な経験です。居住地校交流に興味をおもちの方は、まず、学校へお問い合わせください。地域の友達とのつながり、地域へ参加する足掛かりになればと思います。

## 小学部1年生

### “ドキドキ わくわく” 1年生！



1組5人、2組5人の10人の1年生です。入学した頃は不安そうにしていた子どもたちも、今ではすっかり学校に慣れ、毎日元気いっぱい過ごしています。1学期には運動会、2学期には校外学習や作品展、他にも様々な活動がありました。1年生にとっては“初めて”の連続で、“ドキドキ わくわく”がたくさんありました。友達と一緒に活動することの楽しさも感じながら、いろいろな活動に取り組んできました。一つのおもちゃで一緒に仲良く遊んだり、帰り際に「バイバイ」と言って友達とタッチをしたり、微笑ましい姿も見られるようになりました。1年生の期間は少なくなりましたが、2年生に向けてさらに“ドキドキ わくわく”を積み重ねていきたいと思っています。

## 小学部2年生



### 2年生 公園デビューしました



元気いっぱいの小学部2年生10名は、学校を出て、自分の力で目的地まで歩いて行くことにチャレンジしました。徒歩15分ほどの矢川公園へ2回行きました。1回目は、交通マナーを守って4つの横断歩道を安全に渡る学習、2回目は、色付いた赤や茶、黄色の葉っぱを見つけて拾う秋探しの学習。イラストや動画からは得られない日の光や風、空気の温かさやにおい、芝を踏んだ感覚や聞こえる音…。少しの時間でしたが、友達や先生、ボランティアさんたちと一緒に感じたことは、10人の未来につながっているのだと思います。これからも、様々なものに目を向け、耳を傾けて、友達と一緒に挑戦と発見をしていきたいです！

## 赤い羽根共同募金にご協力いただきありがとうございました

皆さんから寄せられた募金は、8,400円となりました。

この募金は、新潟県内の福祉活動に使われます。

たくさんのあたたかい心を本当にありがとうございました。

